

「地球交響曲」について



地球交響曲とは、一連のドキュメンタリー映画の作品名で、「ガイアシンフォニー (Gaia Symphony)」とも読まれる。全編、龍村仁が監督。イギリスの生物物理学者ジェームズ・ラブロック博士のガイア理論に基づいて制作されたオムニバス形式の作品である。全編を通じて地球を一つの生命体と捉える視点を提示し、映像美と音楽を通じて人間と自然の調和を描写することを目的とする。第1番は1992年11月17日に劇場公開された。

【概要】

本シリーズは1992年公開の『第一番』から2006年公開の『第六番』までが主に自主上映で展開され、これまでに5600回以上の上映を通じて延べ220万人以上の観客を動員した。その後2015年公開の『第八番』まで制作が継続され、2015年時点で累計延べ240万人以上の動員を記録している。各作品では科学者や環境保護活動家、芸術家など多彩な出演者が登場し、「地球の中の私、私の中の地球」をテーマに地球の現状と人間の在り方を多角的に考察する構成となっている。専門誌『キネマ旬報』の作品情報ページでも紹介され、環境ドキュメンタリーとしての注目度の高さがうかがえる。

【制作・上映】

第1番（1992年公開）は全国1749ヶ所で約65万人を動員し、第2番（1995年公開）は全国1453ヶ所で約64万人を、第3番（1997年公開）は全国896ヶ所で約33万人を動員したなど、継続的に上映規模と動員数を拡大した。

【初上映とガイアネットワーク】

この映画は当初、上映する映画館が無かったために、完成から約1年の間「お蔵入り」していた。1992年、龍村が自らチケットを引き受けることを条件に、ようやく数週間の上映に漕ぎ着けた。上映後1日、2日は龍村からチケットを買った友人や知人で満員になったが、3日目から観客は激減。ところが、公開から2週間目を過ぎた頃から、映画を鑑賞した人の口コミにより、当日客が増加した。最終的に、第一番の観客動員は3年目に30万人、第二番は半年で20万人を越えた。

【シリーズ 作品の概要】

地球交響曲第一番（1992年公開）監督：龍村仁

出演：ラインホルト・メスナー、ダフニー・シェルドリック（英語版）、野澤重雄、エンヤ、鶴岡真弓、ラッセル・シュワイカート

野澤重雄の「ハイポニカ研究所」の水耕栽培のトマトの成長と共に映画が進行する。通常1粒の種からは数十個の実しか付かないトマトが、水耕栽培により制限を外すと1万3千個の実をつけることができる。常識を外すことにより、信じられないようなエネルギーが働くことを観客に語りかけている。密猟により孤児になった象の保護と自然へ返す事業をしているダフニーと象のエレナの物語なども収録。「エンヤ」の音楽（7曲挿入）が、アイルランドの美しい風景と調和している。初めて映画でエンヤが日本に紹介されたのは、この作品である。

地球交響曲第二番（1995年公開）監督：龍村仁

出演：ジャック・マイヨール、ダライ・ラマ14世、佐藤初女、フランク・ドレイク

佐藤初女の主宰する「森のイスキア」の四季を紹介しながらこの物語は進行する。佐藤はかつて結核を自らの食事療法で克服した経験を持っているが、その後佐藤は自宅を開放して心を病んだ人々を受け入れた。森のイスキアは、佐藤に助けられた人々によって岩木山の麓に完成した。

本作からはスーザン・オズボーン（英語版）が歌う英詞の「浜辺の歌」がヒットし、後にトヨタ自動車のCMにも使用された。

地球交響曲第三番（1997 年公開）監督：龍村仁

出演：星野道夫、フリーマン・ダイソン、ナイン・トンプソン、ボブ・サム、ビル・フラー等
既に出演が決まっていた星野道夫が、ヒグマに襲われて死去したため、本作は星野の追悼というテーマを持つ 1 本となった。本作では星野の足跡をたどりつつ彼と交流のあった人々を紹介している。前作に続き、スーザン・オズボーンの「知床旅情」「仰げば尊し」などが使用されている。

地球交響曲第四番（2001 年公開）監督：龍村仁

出演：ジェームズ・ラブロック、名嘉睦稔、ジェーン・グドール、ジェリー・ロペス

「第四番」は、“21 世紀に生まれ育つ子供たちのために”というテーマで制作された。ガイア理論の創始者であるジェームズ・ラブロック氏は、ガイアはそれ自体ひとつの大きな生命システムであると考えている。そして、そのガイアの命を守るのは複雑に絡み合う全ての生物。特に、ガイアが生んだ最新の生き物であり、意識を持つ人類の担う役目は大きいと言う。そんな博士が 21 世紀の子供たちに贈るメッセージは「個として生きよ」。この回のメインビジュアルとして使われたのが、名嘉睦稔（ボクネン）さんの超大作「地球交響曲」。

地球交響曲第五番（2004 年公開）監督：龍村仁

出演：アーヴィン・ラズロー（英語版）、石垣昭子

生命の誕生と進化の謎を解き明かす「量子真空エネルギー場」理論を提唱する物理学者アービン・ラズローや、西表島在住の草木染織作家・石垣昭子のほか、これまでの同シリーズの出演者たちも再登場し、「すべての存在は繋がっている」という視点から、「誕生と死」や「再会と出会い」を見つめていく。

地球交響曲第六番（2007 年公開）監督：龍村仁

出演：ケリー・ヨスト、ロジャー・ペイン（英語版）、ラヴィ・シャンカール

第 6 弾となる本作では、“全ての存在は響きあっている”をテーマに、人類以外の存在が奏でる、耳には聞こえない“音楽”について描く。出演はピアニストのケリー・ヨスト、海洋生物学者のロジャー・ペイン、シタール奏者のラビ・シャンカールら。

地球交響曲第七番（2010 年公開）監督：龍村仁

出演：アンドルー・ワイル、高野孝子、グレッグ・レモン

世界各地の伝統医療と西洋近代医学を統合する「統合医学」の第一人者アンドルー・ワイル、環境教育活動家の高野孝子、全身に散弾銃を浴び再起不能とされながらもツール・ド・フランスのチャンピオンになったグレッグ・レモンらが、この世のあらゆる生命体に宿る「自然治癒力」について語る。

地球交響曲第八番（2015 年公開）監督：龍村仁

出演：梅若玄祥、見市泰男、中澤宗幸、中澤きみ子、畠山重篤

何億年にもわたって地球上の生命を生かし続けてきた“樹”をテーマに、奈良県・天河大辨財天社の宝物庫で 600 年もの間眠り続けてきた能面「阿古父尉（あこぶじょう）」の復活に挑む能面打ちの見市泰男氏や、東日本大震災の被災木から作った「津波バイオリン」と名器ストラディバリウスを使ったコンサートを続ける中澤宗幸・きみ子夫妻、海の汚れの原因が森の荒廃にあることにいち早く気づいて植林活動を続けてきたカキ養殖漁業家・畠山重篤氏にカメラを向ける。

地球交響曲第九番（2015 年公開）監督：龍村仁

出演：小林研一郎（指揮者）・スティーヴン・ミズン（認知考古学者）本庶佑博士（分子生物学者 京都大学特別教授 ノーベル生理学・医学学賞受賞者）

『交響曲第 9 番』を指揮する世界的指揮者・小林研一郎。聴覚を失ったベートーヴェンの魂を再現しようとする小林だが、彼の次元に追いつくことはできないと語る。人類が持つ“音”の創造性を追求すべく、スティーヴン・ミズン、本庶佑にインタビューを重ねる。

出典： [Wikipedia／ぴあ 総合 TOP](#) > [ぴあ映画](#) > 地球交響曲 ガイアシンフォニー

龍村 仁（たつむら じん） 1940 年 4 月 23 日^[1] - 2023 年 1 月 2 日

ドキュメンタリー監督、元 NHK ディレクター。有限会社龍村仁事務所代表

来歴

兵庫県宝塚市出身。1963 年、京都大学文学部美学科卒業後、NHK に入局。報道局を経て教育局でフィルムドキュメンタリーの演出に従事。

NHK 教養部のディレクターだった 1973 年 3 月、龍村は、当時矢沢永吉などが所属していたロックバンド・キャロルに密着したドキュメンタリー番組を企画・製作したが、完成した作品に NHK の上層部が難色を示し、再編集した上で音楽番組として放送した。これに憤った龍村はその後、NHK を欠勤し、同じく NHK 職員だった小野耕世（現マンガ評論家）と共に、ATG で龍村の監督によるドキュメンタリー映画『キャロル』を製作。結果、小野と共に NHK を解雇され、解雇を無効として裁判まで行った（詳細は後述）。

その後はフリーの演出家として『地球交響曲』シリーズなどのドキュメンタリー、ドラマ、CM の制作に従事している。2023 年 1 月 2 日 15 時、老衰のため死去。82 歳没。

親族

- 祖父は皇室にも謹織した高名な織物店「龍村美術織物」の創業者で紫綬褒章受章者の龍村平蔵（初代）。父も龍村平蔵（二代目）。叔父も龍村平蔵（三代目）。
- 姉の龍村和子はピアニスト／プロモーター。
- 弟の龍村光峯は画家・織物作家。
- 弟の龍村修はヨガ指導者。

NHK キャロル事件

1973 年 2 月 28 日「ロックンロール・カーニバル」に出演したキャロルを会場で観た龍村がキャロルに取り憑かれ、彼らに帯同してカメラを回しドキュメンタリー『キャロル』を制作した。龍村はキャロルとの衝撃的な出会いを戦後世代の問題として記録しようとした。夜の 7 時半の茶の間に、紹介も説明もしないで、突然、キャロルを登場させるという計画だった。作品は同年 7 月に完成し、月末に放送を予定していたが^[5]「いろいろな人を見る 7 時半という時間帯にキャロルは特殊すぎる」「作り方が客観的でない」「私的すぎて、夜 7 時 30 分のドキュメンタリーに合わない」「不良っぽく、若者にいい影響を与えない」など、NHK 内で放送の是非を巡ってもめ、同月の放送は中止された。『ヤング・ミュージック・ショー』など、外国のロックがようやく放送される時代になってはいたものの、NHK ではロックに対してまだ保守的な姿勢を崩していなかった。龍村は連日マスコミ関係者を集め、自主試写会を敢行し訴えた。また外部雑誌に署名入りで NHK のドキュメンタリー批判を書いた。

この事件は、三大新聞をはじめ、多くのマスコミに取り上げられ社会問題に発展した。この反応を無視できなくなった NHK は、若者の音楽番組の枠で、一部をカットしたうえ放映すると提案したが 9 月末に NHK は、フィルムを強引に龍村から奪い「試写運動をしたり、雑誌に NHK 批判をする者に、ディレクターとしての仕事をさせるわけにはいかない」と通告し、後述する映画制作までの 4 ヶ月間、龍村は毎日 NHK に出勤し 1 日中デスクに座り続けた。結局 NHK は『キャロル』をドキュメンタリーとしては断固として認めず^[13]大幅にカットされたものが^[2]同年 10 月 20 日、午後 2 時 10 分からの『ヤング・ミュージック・ショー』を 30 分後ろにずらして、その枠で放送されるはずだったが、中日対阪神戦中継とかち合って中止に。

この年は巨人 V9 の年で、中日一阪神戦は優勝争いのクライマックス。新幹線で大阪移動中の巨人ナインが、名古屋を通過する手前、中日球場のスコアボードを新幹線から覗き込んだと

いわれる逸話で有名な試合だった。結局ドキュメンタリーとしてではなく『ヤング・ミュージック・ショー』にくっつけ、一部の若者向けのロック番組として、プロ野球のスタンバイ番組として、同年10月28日午後4時に放送された。龍村はあくまでもドキュメンタリーとしての放映を主張。その後龍村と実質上の製作者で脚本を担当した小野耕世（国際局渉外部所属）は、1974年2月20日からATGに資本を受け映画撮影を開始した。龍村は自力で600万円の製作費をかき集め映画につぎ込んだ。

この映画にして公開しようとしたことで、NHKの認めてない映画製作の業務に従事したことと、度重なる出勤命令を無視した就業規則違反という“純規律違反”で、1974年6月13日付けで二人の休職が発令された。これを不服として二人と日放労が異議申立てに踏み切ったが、同年7月23日、NHKは二人を懲戒免職処分とし同年9月9日、NHKは龍村の解雇を発令した。映画『キャロル』はATG資本で完成し、1974年6月22日から東京アートシアター新宿文化、日劇文化劇場で公開された。キャロルがNHKである種のボイコットを受けたことは、若者たちの間で異常なほどの人気で迎えられた。龍村らはその後裁判を起こし10年間NHKと争ったといわれる。

「もし、母なる星地球が本当に生きている一つの生命体である、とするなら、我われ人間は、その「こころ」、すなわち「想像力」を担っている存在なのかもしれません。我々人間は、その「想像力」に依って科学技術を生み出し、地球の環境を大きく変えてきました。

現在の地球の環境問題は、良い意味でも、悪い意味でも、人類の「想像力」の産物だ、と言えるのです。だとすれば、危機が叫ばれるこの地球ガイアの未来もまた、自ルイン生「想像力」即ち「こころ」の在り方に依って決まってくるのです。

この映画は、地球ガイアの未来にとって、きわめて示唆的なメッセージをもつ世界の6人の人々のオムニバス映画です。登場人物はいずれも、現代の常識を超えたことを成し遂げた人、あるいは体験した人達です。今生きている我々ひとりひとりが、「こころ」にどんな未来を描くかに依って、現実の地球ガイアの未来が決まってくる。映画「地球交響曲」が、すべての人々の心のための元気薬になれば、と願っています。」

地球交響曲 Gaia Symphony

あなたの声を、
風は、確かに聴いているんです。
山だって、耳を澄ましている。
花や樹は、
あなたが呼びかけていることを、
もうとっくに知っています。

地球ガイアの声が、聞こえますか。

喜びで、トマトの顔が真っ赤になった。
医師だって震え始めた。
象や鯨たちが、あなたに会うために
歩み始めています。
心で聞いてください。

地球交響曲。

映画監督 龍村仁

